

# 西光寺だより

第二五〇号 令和五年 二月一日発行

## 和をもって貴しとなす

このお言葉は、日本で初めて仏教を広められ「和国の教主」（日本のお釈迦さま）と讃えられている聖徳太子の、『十七条憲法』第一条のお言葉であります。

「和」は「やわらぐ」「なごやか」と読み、国の内外で対立や争いが絶えない中で互いに調和し、穏やかに暮らしていける社会を目指されたお言葉であります。

そして第二条に「篤く三宝を敬え」といわれ、そうした社会を実現するためには、仏・法・僧の三宝を大切にすべきと示されています。

私と他人とは対立して存在しているのではなく、お互いの関係の中で交流し合って生きている。このことに気づかされ、同じ道を歩んでいくことが本当の「和」でありましょう。

だからこそ、自分の思いを優先し対立し争い合う身勝手な私達に、分け隔てのない心をもった仏さまのみ教えをお勧めになったのであります。

今年（令和五年）は親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要を京都西本願寺で厳修されます。心おだやかに仏さまのみ教えを聞かせていただき、和やかに過ごせる一年にしたいものであります。（新報）

茨木東組の団体参拝は四月二日（日）十四時からであります。

西光寺からは7人のみ参加という制限であります。

希望される方は西光寺までよろしくお願い致します。

合掌

## ■今月のカレンダー■

世の中に 最も度し難いものは 他人ではない この私

去年の秋ごろ、久しぶりに友人と会う機会がありました。七〇歳になった私たちは、自分や家族、病氣、薬のことや、同級生の消息についてずいぶん長い時間話し、楽しく過ごしました。その中に次のような会話がありました。

友「最近、ちよつとしたことで腹が立つことが多くなって困っている」

私「どういうこと？」

友「町のコンビニで買い物したときなど、前のお客さんが小銭で、もたもたしてたり、病院などで待たされると、イライラしている大きな声を出してしまうことが多くなって自分ながらあきれている。そんなことはないか？」

私「うん、あまりそのように感じたことはないねえ」

そう言って、私はたまたま持っていた『注釈版聖典』（浄土真宗のみ教えを学ぶための聖典）を開き、彼と一緒に読みました。

「凡夫」といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、……

（『一念多念文意』『注釈版聖典』六九三頁）

私「これは親鸞聖人が、我々凡夫についてのお言葉で、凡夫とは常に自己中心で、真実に暗く（無明）、欲や怒りはいくつになってもなくならず、いのち終えるその時まで消えない。さらに親鸞聖人は、そのような自分について『恥づべし傷むべし』とも

おっしゃっている。だから少しのことで腹が立つ自分に気づきそれをあきれていることは、素晴らしいと思うよ」

友「ふうん、はじめて聞いた。少しは仏教の勉強もしてみるか」

帰宅して、妻にその時のことを話しました。

妻「あなた、本当にちよつとしたことで腹を立てないと思っているの。外でのことは知らないけれど、家の中では、二・三日に一度くらい、私にあたりちらしているわよ」

ショックでした。

そういえば思いあたることがあります。

母は相当耳が悪くほとんど聞こえませんし、妻も最近少し耳が悪くなってきた聞こえづらいついがあるようです。そのような二人に話しかけ自分の思いを伝えようとすると、うまく伝わらないことがあると、おだやかにゆっくり大きな声で話せばよいものを、ついイライラして大きな声で怒っている自分がいました。

自分のことには、なかなか気がつかないものがあります。

私「ごめんなさい。」

世の中に最も度し難いものは、他人ではないこの私でした。

(法語カレンダー 解説書より)



## ◆先月の報告◆

一月十一日(水) 追手門学院大学地域創造学部の生徒さん20人が西光寺に来られました。地域に貢献する活動を大学でされており、ゼミの先生と生徒さんが参拝されました。

西光寺の歴史をお話させていただき、仏さまはいつでも見守って下さっていることをお伝え致しました。なかなか学生さん相手にお話しさせていただく機会はありませんが、真剣に耳を傾ける姿にこれからの未来を感じることであります。

これからもこういうご縁を作ってゆき、誰でも気軽に足を運べるお寺づくりをしていきたいと、新たな思いをいただいたお時間でありました。皆さまも法要の場としてだけではなく、どうぞ寄合の場としてもお越しくくださいませ。

追手門学院の皆さま、ようこそのお参りでございました。

